

東日本大震災からの地域復興を考える
ー弘前大学ボランティアセンター活動報告会・研究報告会ー事業報告

弘前大学ボランティアセンターでは、弘前市、弘前大学人文学部の共催、岩手県野田村の後援で「東日本大震災からの地域復興を考えるー弘前大学ボランティアセンター活動報告会・研究報告会（以下、活動・研究報告会）」を平成26年3月10日（月）に、ヒロロ4階弘前市民文化交流館ホールで開催した。活動・研究報告会は2部構成で、第1部、2部を通して、約100名の弘前市民、行政関係者、大学関係者が出席した。



会場入り口



会場内の様子

第1部では、科学研究費補助金（基盤研究（A）「北リアスにおけるQOLを重視した災害復興政策研究ー社会・経済・法的アプローチ」（JSPS科研費24243056・研究代表者 李 永俊）と平成25年度人文学部戦略経費「東日本大震災後の東北地方のQOLと労働福祉法政策研究」の助成を受けて「先行事例から考える地域復興 各国の災害対応を問い直す」をテーマに、日本、アメリカ、インドネシア、そして中国での災害復興に関する研究報告が行われた。

各報告を通して、被災者の生活を優先することの重要性や、復興のスピード、地域活性化のプロセスに焦点をあてることなど、これまでの災害復興研究を土台とした貴重な知見が提供された。

研究報告終了後の質疑応答では、活発な意見交換がなされ、研究者をはじめ、被災地支援に参画している市民や行政職員、NPO等の関係者とともに、今後の地域復興を考える研究報告会となった。



第1部 米国テラウェア大学ジョン・ニグ氏による報告



第1部 神戸大学名誉教授豊田利一氏

第2部では、チーム・オール弘前の一年として「弘前大学ボランティアセンターの活動報告会」が行われた。佐藤敬弘前大学学長の開催挨拶の後、蛭名正樹弘前副市长（葛西憲之弘前市長代理）による来賓挨拶、小田祐士岩手県野田村長からのビデオメッセージの上映があった。



佐藤敬弘前大学学長挨拶



蛭名正樹弘前副市長の来賓挨拶



小田祐士野田村長によるビデオメッセージ



第2部配付資料

引き続き、中林一樹明治大学特任教授を講師に迎えて、「災害復興を再考する」をテーマに基調講演が行われた。この基調講演を通して、これからの災害復興は、これまで言われてきた「迅速な復興」ではなく、「迅速な復旧（日常生活を取り戻す）」を優先し、「迅速な復旧、着実な復興」を目指せる復興の仕組みを作ることが必要であり、人々の笑顔を取り戻せる取り組みづくり、人々の気持ちが前向きになることが着実な復興に繋がると中林氏は来場者に向けて話していた。

また、野田村活動報告Ⅰでは、岩手県九戸郡野田村にて「チーム北リアス」メンバーとして復興支援・交流活動を行っている河村信治八戸工業高等専門学校教授から、同村で実施したシャレットワークショップ（専門家や学生が集まり、地域のまちづくりに対する提案や意見交換を行うワークショップ）の事例報告が行われ、シャレットワークショップの3年目を展開し、住民主体のまちづくり、『まち育て』への橋渡しができればいいと話していた。



第2部 中林一樹明治大学特任教授による
基調講演の様子



第2部 河村信治八戸工業高等専門学校教授
による活動報告の様子

野田村活動報告Ⅱでは、弘前大学ボランティアセンターを通して同村に支援・交流活動として定期的に出向いている学生と弘前市民から「チーム・オール弘前」の平成25年度の活動報告があった。

学生の報告では、同村での活動を紹介する映像の上映があり、来場者は野田村の様子やボランティア参加者と現地の方々の交流の様子、子供達の笑顔が納められた映像に見入っていた。また、報告の中で「子ども達に『また来る』という安心感を与えたい、自分自身が『また会いに来よう』という気持ちを持ち続けるために、いつも活動が終わり帰る時は『またね』と声をかけるようにしている。」という学生の言葉が印象的だった。

市民の報告では、「復興が進んではいるものの、まだ充分な状態ではない」「交流活動を行っている場所に来ない方へのケアも必要」「チーム・オール弘前として行っている支援・交流活動が、野田村の方々にも受け入れられている」と活動を通して感じ、今後もきめ細かい対応が必要であると来場者に向けて話していた。



第2部 学生による活動報告の様子



第2部 市民による活動報告の様子



大河原隆センター長による閉会の挨拶

最後に、弘前大学ボランティアセンター長より挨拶があり、研究者、学生、市民それぞれの目線からみた復興支援に対する想いが伝わる活動報告会となった。

なお、「チーム・オール弘前」の野田村復興支援・交流活動は平成26年度も引き続き継続していく予定である。